

米国における日本学の現状に関する研究

渡邊正彦・佐藤由紀・照屋さゆり

1. はじめに

リベラルアーツ学部では文学部リベラルアーツ学科開設時から、メジャーの一つとして「日本学」を設置し、日本の文化・歴史・思想・文学を中心にこれを展開してきた。多くの学生がこの分野に関心を寄せリベラルアーツ学部における重要なメジャーのひとつである。

2007年にスタートしたりベラルアーツ学部では、常に学部改革や改組を視野に入れた検討作業を行ってきたが、日本学はそのなかの柱の一つで、今後も位置づけていくことが想定されている。これまで以上に本格的かつ広い視野を備えた学問領域として展開させなければならぬと考え、日本人のための日本学の可能性をさらに追求・発展させることをねらいとして計画した共同研究である。

2. 研究の目的および背景

2014年度のリベラルアーツ学部共同研究「ヨーロッパにおける日本学の現状に関する研究」に続いて、アメリカでの日本学の現状に関して調査を行うことで、日本における日本学のあるべき姿を見いだし、リベラルアーツ学部で予定されているジャパNSTAディーズ領域の参考に資することが、今回の研究の目的である。

そもそもヨーロッパとアメリカそれぞれにおける日本学の在り方が異なる点は1960年代より文化人類学者や社会学者、日本文化研究者等より指摘されてきた(祖父江, 1969; 中根, 1969; 白井, 1994)。1969年4月11日、12日にアメリカのRice大学においてSocial Science Research Council主催でおこなわれた「行動科学分野における日本研究」というシンポジウムに、文化人類学者の祖父江孝男が出席した際感じた、アメリカとヨーロッパの日本研究ないし日本研究者の違いを以下のように述べている(祖父江, 1969)。

まず重要な点の第一は(アメリカの)日本研究者

における日本語習得の重要性についてである。特に日本研究を専門とする学者たちは、これから日本語の会話だけでなく、日本語の論文を読みこなす能力をもっと身につけなければならないという点が、何人もの人びとから一様に指摘されたことである。(中略)要するに従来、人類学者は調査のための日本語(会話)で充分であり、日本語の文献を読むことはそれほど必要だと思われていなかったのである。

(中略)

(英国の)DORE教授などは……日本語で書かれた社会学関係の学術書など、日本人と同じ速度で楽に読破してしまい、農村へ行っているとき頼まれればサラサラと色紙に一句したためるというくらいの人である。それからまたオーストリアのウィーン大学から来ている人類学、社会学の若手研究者たちの場合はこれまた変体ガナまでマスターしているので、農村調査に必要な古文書まで相当にこなせるのである。

(括弧内は筆者挿入)

さらに祖父江(1969)は、アメリカとヨーロッパ(特にオーストリア)の日本研究の相違の原因を以下のように指摘している。

こうしたオーストリアと米国の事情のちがいは各々の歴史的背景によるところが大きいと思う。米国では日本人の人類学的研究がもっぱら実態調査から始まったのに対して、ウィーン大学の日本研究所は「文化史的研究」から出発しているし、従って長いこと文献研究が中心となってきた。

アメリカとヨーロッパそれぞれの日本学は、その歴史の出発点で相違があった。その相違が現在のそれぞれの日本学にも影響を与えていることは想像に難くない。またそういった相違点を踏まえ、自国自らおこなう日本学の位置を定めていくことで、まさに国際的視点からの

ジャパニスタディーズを検討することができる。そこで、2015年夏にアメリカでの現地調査をおこなうこととなった。

本調査では、ミシガン大学（日本研究センター センター長 Jonathan Zwicker先生 副センター長 筒井清輝先生 マネージャー 深澤ゆりさんと懇談）、ボストン美術館（フェノロサ・コレクションを中心とする日本美術の展示見学）、ボストン近郊のセーラムにあるピーボディー博物館（明治初期に東京帝国大学で生物学を講じたモースの民俗学資料のコレクション見学）、およびドナルド・キーン日本文化研究センターのあるコロンビア大学を訪問した。その際に得られた所感を元に、考察を進めていきたい。

3. 訪問先より得られた成果および所感

①ミシガン大学およびコロンビア大学

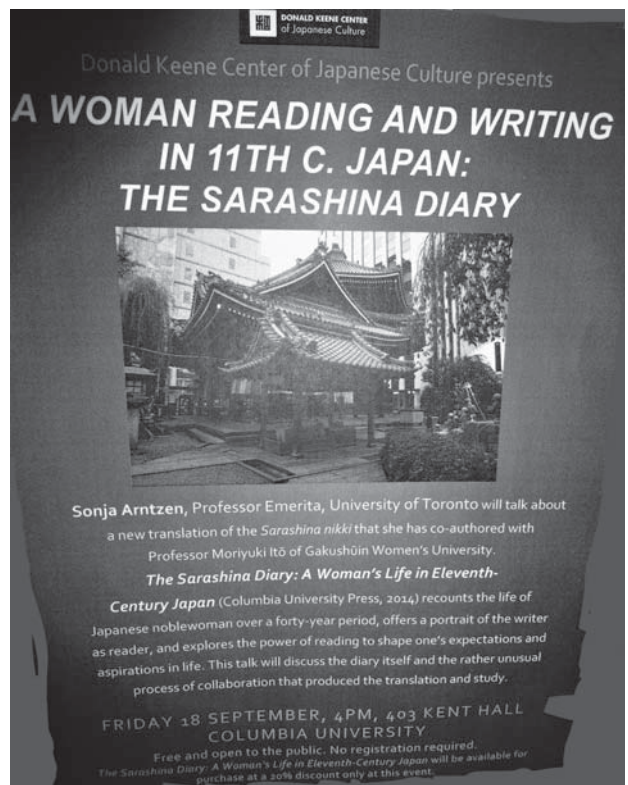
おととし訪問したウィーン大学では、日本学は中国・朝鮮をそれぞれ研究するセクションと統合されて、新たに東アジア研究センターとして再編成されていたが、ミシガン大学ではそのような統合の動きは全くなく、他のアメリカの大学を見渡しても、小規模な大学を除いて、やはり統合再編成の動きは全般的にないということであった。この点は、ウィーン大学のような歴史ある大きな大学でも、国際情勢の中で相対的に重要度を減らしている日本を近隣諸国と一まとめにしていこうとするヨーロッパの研究拠点の状況との違いとして指摘できよう。

ミシガン大学のJonathan Zwicker先生は日本の近世・近代文学（特に明治期）が専門ということであった。政治やサブ・カルチャーなどcontemporary Japanに関する研究もミシガン大学で数多く行われていることはもちろんなのだが、historical studiesのプロパーが日本研究センター長であることは、アメリカにおける日本学がプラクティカルな実利実益や、漫画やアニメなどのサブ・カルチャーを中心としたコンテンポラリーな日本の文化だけに偏していないことの証左とも受け取れよう。Zwicker先生はかつてコロンビア大学でドナルド・キーンの影響を受け、キーンの学問に深い尊敬の念を抱いていらっしやう。帰化を決意するまで日本とその文化・文学を愛し、ややともすればそのことが客観的な価値評価の基準を曇らせてしまっているのではと感じられることさえあるキーンの学問に対して全幅の信頼をおくZwicker先生のスタンスは、アメリカの日本学の成立している基盤の一つをかいま見せているように感じられた。

コロンビア大学では、関係者に直接話を聞くことはできなかったが、ドナルド・キーン日本文化研究センター前の掲示板には、そこで行われる講演会の内容を記載したポスターが貼られ、中でも「更級日記」に関する講演会のものは印象に残った。ヨーロッパを訪問した際に目についたアニメキャラクターや宮崎駿のアニメなどサブ・カルチャーを中心とした日本のコンテンポラリーな文化状況に関する興味関心は、今回訪問した二つの大学ではヨーロッパほどは感じられなかったと言ってよいように思われる。

② セーラム ピーボディー博物館

ヨーロッパを訪問した際は、ヨーロッパにおける日本研究の嚆矢とでもいうべきシーボルトのジャパン・コレクションを、ライデンのシーボルト・ハウス日本博物館および国立民族学博物館で視察した。日蘭貿易の門戸である長崎の出島のオランダ駐在員の健康管理を目的に1823年日本に到着したシーボルトは、自然科学や地理学・民族学の領域での広範な資料や多種多様な文献を収集した。現在記念館で見ることのできるシーボルトによって整理分類された植物の膨大な数の標本、そしてス



「更級日記」講演会のポスター



江戸期の玩具店の看板

パイの嫌疑をかけられて取り調べを受け、日本への再入国禁止という処置の下るシーボルト事件の発端ともなった当時の日本地図などを見ると、植物は植物学の客観的な体系の中に整理分類され、地図は地域別に詳細な地形が記されており、彼が未知の国で初めて目にした諸物を、「自然科学」・「博物学」（総合科学）に立脚した視座から眺めたことが、はっきりうかがえる。

一方、アメリカにおける日本研究の最初期の人物として、大森貝塚の発見で有名なモースを上げることができる。彼は日本で陶器と民具の収集を熱心に行ったが、そのコレクションがボストン近郊のセーラムにあるピーボディー博物館に収められていると聞いて訪問した。訪問時に展示されていたのは彼のコレクションのごく一部であったが、そこで彼が収集した民具を実際に目にする事ができた。

モースは日本の家屋を調査して『日本人の住まい』という著作を残しており（斎藤正二・藤本修一訳 八坂書房 2004年4月）、その序論で次のように述べている。

われわれはなんども繰り返して言いたいが、このような調査をおこなうには、対象に対する共感の

精神を持たなければならないのである。そうしなければ、見落としとか誤解とかが多くなる。このことは、社会慣習について妥当するのみではなくして、他の方面の調査研究についても同様である。日本の絵画芸術に関する最高権威であるフェノロサ教授が「この精神に育まれた繊弱な子供たちに、単なる好奇心の目だとか、外国の流派に見られる冷徹厳格な基準だとかをもって接するのは、じゅうぶんに行き届いた仕方ではない。日本の芸術家が愛するのとまったく等同にそれを愛する仕方に習熟するほどの、広大なる心を持てるようになったとき、はじめて、かれらの隠れた美しさの輝かしい全容は、ヴェールを剥いで正体をあらわすことが可能となる。」と言っているが、まことに正説である。

ここから看取されるのは、客観的な観察だけに拠らず、「共感」することを縁として対象を把握していこうとする、民族学的な調査に臨む際のモースの姿勢であるといえる。展示されていた土鍋や玩具を見ると、権威とは無縁の庶民や子供の生活に「共感」を寄せるモースの眼差しを感じることができるように思う。

③ ボストン美術館

ボストン美術館には、フェノロサ等の収集した国宝級のものを含む多彩な日本の古美術品が収納されている。フェノロサの日本の古美術に対する際のスタンスについては先のモースの引用の中にかがわれるが、来日後狩野派絵画に魅せられたフェノロサは狩野永恵に弟子入りして、「狩野永探理信」という名までもらっている。

一方、フェノロサ以外にもボストン美術館に大量のコレクションが収められている人物に、ウィリアム・S・ピゲロー（1850—1926）がいる。ピゲローは外科医の子供として生まれ、家業の外科医を継ぐべくジャポニズムの嵐の吹き荒れていたパリに留学するが、やがて外科医の勉強に嫌気がさし、ボストンで聞いたモースの講演を契機に三度目の来日をしたモースに同行して1882年6月日本を訪れ、フェノロサとも合流して美術品を渉猟する旅に出た。モースは『日本その日その日』（石川欣一訳 講談社 2013年6月）の中に、その時のことについて、次のように記している。

我々は古い日本の生活をすこし見ることができるだろう。私は陶器の蒐集に多数の標本を増加しようと思う。ドクター・ピゲローは刀剣、鏢、漆器の色々



天台宗の修行中のビゲロー

な形式のものを手に入れるだろうし、フェノロサ氏は彼の顕著な絵画の蒐集を増大することであろう。かくて我々はボストンを中心に、世界のどこよりも大きな、日本の美術品の蒐集を持つようになるであろう。

今回見学した日本コレクションの中で仏像は、常設展示としてレイアウトに工夫を凝らして展示されている。これらを収集したフェノロサ(当時35歳)とビゲロー(当時32歳)は、85年9月には共に三井寺法明院にて受戒、その後生涯に渡って仏教の修行にのめりこんでいった。(ちなみにフェノロサの前妻は、受戒に応じなかった。)彼らが日本美術の深奥を究めようと望んだ際、そこに流れる精神的なものを感得することが不可欠との考えが、受戒を受けた理由の一端として考えられてしかるべきと思われる。フェノロサの墓は現在三井寺法明院に客死先のロンドンから後妻により改葬され、ビゲローもその隣に分骨されて墓銘碑が建てられている。

4. アメリカ調査の総括

今回の訪問で、アメリカの日本学はコンテンポラリーな日本に関する研究のみならず、日本の歴史に分け入って深くその内面を極めようとする姿勢を、現在のヨーロッパのそれよりも多く持っているという印象を受けた。その点を contemporary studies の観点から考察すれば、次のような原因が考えられよう。過去においても現在においてもそうであるが、アメリカの経済は世界的レベルの中では常に富裕である。(ニューヨークのメトロポリタン美術館の印象派のコレクションには、画集にも載っていない素晴らしい作品がごろごろしており、目を見張らされた。)美術品のコレクションの豊富さも、大学の組織を細分化させて運営していくことも、その経済力に支えられて可能になっているという面が多分であろう。すなわち、かの地の日本学が、ビジネスと直接関係のない文化的な分野に資金を投入することができるという状況の上に拠っているという事情が反映しているのではないだろうか。

一方、モース以来のアメリカの日本研究の流れを視野に入れた historical studies の観点からこの点について考察すると、次のように考えられるのではないかと。様々な民族により形成されているアメリカは、ヨーロッパ諸国のように文化的アイデンティティーが強固に築かれてはおらず、他の文化に対して柔軟性を持っていた。たとえば、19世紀後半のヨーロッパで日本の浮世絵が美術に大きな影響を与えるが、それらはモチーフやコンポジションの面で受け入れられただけで、その精神性までに思いをはせる人は、ヨーロッパにはいなかった。ヨーロッパの人々は日本の浮世絵にインパクトは受けたが、ショックを受けはしなかった。

ところがアメリカでは、モース、フェノロサ、ビゲロー、キーンと日本の文化に共感、あるいは同化しようとする人々が、日本研究の基礎を築いていった。彼らによって感得された日本文化の精神面に関する関心が、現代においても受け継がれ、contemporary な面のみならず historical な研究を現代においても盛んにしているのではないかと。

以上、アメリカの日本学について、contemporary な面、historical な面、両面から評価を試みたが、これらが兼ね備えられたところに、日本に対する通時的かつ共時的な評価が可能となることが了解されるであろう。地域研究としての日本学の中で日本を相対化していくためには、これらの両方の視点が必要であるという点を、二年間に

わたる外国の日本学の調査より得られたものとして総括としたい。

5. 「ジャパNSTAディーズ」を成立させるために

「いま」の日本もその対象に含め、且つ、その精神性を自身の文化に取り入れることも厭わずに研究をおこなっているアメリカにおいて、「日本研究」を成立させ続けるために重要なことは何か、をミシガン大学日本研究センターでZwicker先生におたずねした。

そのキーワードの一つが「学際性 interdisciplinary」であった。日本研究センターに所属する教員は、それぞれが自身の専門分野に通ずる学部にも所属しており、兼担という形で日本研究センターにいる。言い換えれば、「日本」という地域が対象であるということだけが共通事項であり、それぞれの研究分野の方法も目的も異なる。つまり日本研究センターは学際的な場なのである。しかしその学際的な場は、単に専門性の異なる教員を野放しにし、個々の自主性だけに任せて交流させておけば成立するようなものではないことを強調されていた。

その上で、Zwicker先生が日本研究センターを学際的場として成立させる「学際性」を育てるために重要だと考えていることは、以下の三点であった。

- ① 各教員の専門性の深さ
- ② 各専門性を連携するための教育システム作り
- ③ 連携を助けるためのアシスタントの存在

印象深かったのは、③に挙げたアシスタントの存在の必要性を強く主張されていた点であった。専門性の高い教員同士だけでは、交流（連携）の成功の可否はそれぞれ個人の性格や資質に頼らざるを得ない。しかし、交流を「専門」の仕事とするアシスタントが存在することで、教員の性格や資質に依らずに交流の場を作り、その交流を深くし、教員同士の連携を促進することができるため、その存在は必須だ、とおっしゃっていた。

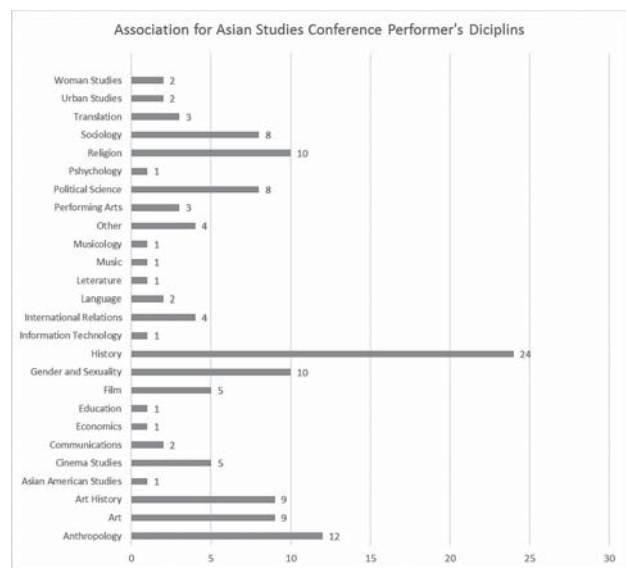
人は交流の中からその場への意味と意義を見出す。そしてその交流の深さがおそらく、その場を意義のあるものとするかどうかの大事なポイントとなる。意義のある深いつながりを持つ場ができれば、その場を保有する組織は「新しい学術領域 Interdisciplinary Research」の創出を可能とする。

ジャパNSTAディーズを「一定期間の共同研究

Multidisciplinary Research」ではなく、「新しい学術領域 Interdisciplinary Research」（学際融合教育研究推進センター、2016）として成立させるためには、単に日本を研究対象とする教員だけを集めるのではなく、アシスタントを含めたシステムを作り、教育および研究の両面で意義のある連携（交流）の場を仕掛けることが必要なのである。

6. その他の調査より

- ① 米国の研究者より、多くの日本研究の発表が行われているという学会（Association for Asian Studies）の紹介があった。ちょうど第75回のプログラムができあがったところだということで、発表者のバックグラウンドについて確認したところ、下記のような分野の研究者が参加していることが確認された。



学術分野としてはHistory（歴史）分野が圧倒的に多いが、人類学、ジェンダー研究、宗教学などの分野も少なくない。

大学に訪問していた米国大学（西フロリダ大学）の学生へのインタビューでは、日本に興味を持った理由に、ポケモンや仮面ライダーなどのアニメで育ち、日本語を含む日本への興味がわいたということがあったが、ポップカルチャーなどの現代研究よりも、歴史を核とした論議が行われていることが、発表者のタイトルなどをみると確認できた。

② ピッツバーグ大学東アジア図書館の日本研究司書がまとめた動向調査⁽²⁾によると、ピッツバーグ大学には東アジア図書館約39万冊の蔵書のうち、日本研究書籍は12万冊、雑誌は270タイトルの受け入れを行っているという。もともと敵国研究としてはじめられた地域研究の一環だったようであるが、1970年代後半には貿易不均衡の是正、外交政策、国際経済研究のための資料収集に変化しているという。その後領域がひろがり、文学、歴史、経済史、美術史、映画、漫画研究、ネットアイドル研究などのサブカルチャーにも広がったという。

日本研究にかかわる教授の研究分野として 文化人類学 (2) 日本語教授法、言語学、文学、劇文学、映画研究、歴史学 (4) 経済学、国際関係論 (2)、美術史 (2)、経営学 (3)、宗教学 (2)、社会学 となっている。() 内は教員数、() なしのは1名。

文化人類学の教員の例をみると、1980年代後半の日本の民放テレビ局でフィールドワークを実施し、この時期に流行したトレンドードラマをテーマにして日本研究を行っている。

また、1960年代後半の地方の民家に住み込み、民俗学的アプローチによって、生活、文化、宗教などを研究した例もある。ほかにも雑誌「女性自身」の記事から大衆の皇室観の変遷を研究している例もあった。

日本の「味」として、小説、エッセイ、アニメ、マンガなどのメディア教材でとりあげられた戦後の食糧難から高度経済成長期に至る、社会的、文化的変化を「食」をテーマに検討した例や、映画からみる日本文化と社会、西部劇とサムライ映画の比較なども題材になっている。

社会学では、「サザエさん」などのマンガを通して、日本の家族の葛藤と変容を論じている。日本のマンガ研究がマンガの表現論や歴史、マンガ産業などのマンガそのものを扱っているのに対して、米国のマンガ研究はマンガを通して日本の社会や文化を探ろうとしているものが多いようである。日本語教育分野では、読み書き重視から、コミュニケーション重視に変わっているという報告もあった。

7. おわりに

日本における日本を対象とした研究はすべて日本研究となることから、これまで「日本学」という学問分野は日本において成立しないといわれてきた。そのような中

で、リベラルアーツ学部ではメジャーのひとつとしてとりあげ、日本に向けられているグローバルな視点を感じながら、日本の様々な事象を扱う研究として学生も教員も共に取組みを続けている。

新しい学部カリキュラムでは、ジャパン・スタディーズ系領域の中で、日本語・日本文学メジャーと共に日本学メジャーとして確立し、これまでになかったサブ・カルチャー、英語で学ぶ日本に関する科目などにより、現代日本の成り立ちや、現状を正しく理解し、発信できる人材養成を行うことが予定されている。本研究の成果がこれからのリベラルアーツ学部の人材養成に資することを切に願っている。

注

- (1) <http://www.asian-studies.org/>
- (2) Current status of Japanese studies in the U.S., 2008, 長橋 広行, 国立国会図書館月報566号

参考文献

- 白井祥子 (1994) 「米国における日本研究」『日本研究』10, pp. 193—309, 国際日本文化研究センター.
- 京都大学学際融合教育研究推進センター (2015) 『異分野融合、実践と思想のあいだ。』京都大学学際融合教育研究推進センター
- 祖父江孝男 (1969) 「『米国における日本研究』シンポジウムに参加して (I)」『民俗学研究』, pp. 88—91, 日本民族学会.
- 谷口陽子 (2010) 「ミシガン大学日本研究所について」『共同研究会 第二次大戦中および占領期の民俗学・文化人類学』2010年7月17日, 神奈川大学日本常民文化研究機構
- 中根千枝 (1969) 「『米国における日本研究』シンポジウムに参加して (II)」『民俗学研究』, pp. 92—93, 日本民族学会.
- モース, E. S. (2004) 『日本人の住まい』八坂書房.
- モース, E. S. (2013) 『日本その日その日』講談社学術文庫.

注 本研究は、平成27年度玉川大学リベラルアーツ学部共同研究助成金のサポートを受けて行われた。

(わたなべ まさひこ／さとう ゆき／てるや さゆり)